

## アスクレピオスの「癒しの事績」

——古代ギリシアにおける癒しの信仰——

土屋 睦 廣

はじめに

古代ギリシアにおける病と癒しといえば、まず思い浮かぶのは、おそらくヒポクラテスに始まる合理的医学の誕生の話題であろう。実際、古代ギリシアの医学は今日の科学的医学の礎であるだけでなく、その独自の思想と発展はそれ自体とても興味深い研究対象である。とはいえ、今回の私の発表では、古代ギリシアにおける癒しのもう一つの重要な側面である宗教的癒しの問題を採り上げる。その最も顕著な例がアスクレピオス信仰である。

アスクレピオスの生い立ちや生涯に関する最古の資料は、ピンダロスの詩である<sup>1)</sup>。それによれば、彼はアポロンとテッサリア王ブレギュアスの娘コロニスの子で、コロニスは妊娠中に不貞を犯したため、アポロンが遣わしたアルテミスに射殺される。我が子

を不憫に思ったアポロンは火葬にされる母親の胎内から子供を救い出し、ケンタウロス族の賢者ケイロンに託して医術を学ばせる。かくして、アスクレピオスは名医となり人々を癒すが、金銭に目がくらみ、死者を生き返らせるといふ不遜を犯したため、ゼウスの雷霆によって撃ち殺されたという。また、彼は死後、天に上げられて、「蛇遣い座」になったという後代の伝説も有名である。

アスクレピオスの祭祀を確認できる最古の考古学的遺物は、前五世紀初頭のもものとされている。アテナイには、ペロポネソス戦争中の前四二〇／一九年に勧請された<sup>2)</sup>。プラトンによれば<sup>3)</sup>、ソクラテスの最後の言葉が、アスクレピオスに鶏を捧げてくれというものであったことはよく知られている。前四世紀には、アスクレピオスの信仰は地中海世界各地に広まり、ローマにも、疫病が流行した前二九三年に勧請された<sup>4)</sup>。

信仰の中心地となったのは、ペロポネソス半島東部のエビダウロスである。劇場や競技場、浴場や宿泊施設を備えた壮大な神域は、保養と娯楽を兼ねた一大ヘルスセンターの観を呈していた。とはいえ、以下に述べるように、癒しの眼目は夢による信仰治療であった。エビダウロスは、キリスト教が広まってオリュンピアやデルポイの聖地が廢れた後にも、アスクレピオスの聖地として古代が終焉を迎える五世紀末まで栄えた。病に苦しむ当時の人々にとっては、科学的な医学よりもアスクレピオスの方がずっと頼りになる存在だったに違いない。

## 一 碑文の分析

エビダウロスの神域から出土した四本の石柱には、前四世紀後半の書体で七〇に及ぶアスクレピオスの「癒しの事績」(taizart)「が記されている。<sup>⑧</sup>類似した「癒しの事績」の碑文は他にも各地で出土しているが、エビダウロスの碑文は内容の豊富さにおいて他を圧している。アスクレピオスによる癒しを今日に伝える最も重要な資料である。今回の発表では、この「癒しの事績」のテキストに基づいて、アスクレピオスによる癒しがどのようなものと思われたいのかを明らかにすることで、病と癒しという人間にとってきわめて普遍的で切実な問題に対して、古代ギリシアの人々がどのような思いを抱いていたのかを考察する手掛かりとしたい。

まず、個々の事例を見る前に、全般的な特徴を見ておこう。「癒しの事績」のほとんどは、現実にはありえない奇跡物語である。多くの場合、癒しのために神域を訪れた「嘆願者」と呼ばれる人たちは、「アバトン (Abaton)」と呼ばれる施設で眠りに就いた。「アバトン」とは「立ち入りできないところ」という意味で、一般に神殿の内陣などの「聖なる場所」を意味するが、エビダウロスのアバトンは、アスクレピオス神殿の北隣にあった柱廊式の建物であった。碑文によれば、夢に神が現れて治療を施し、患者は目覚めたときにはすっかり健康になっていたと伝えられている。嘆願者の男女比を見ると、女性が五七件中一五件で、四分の一余りを占めている。当時、市民の女性は一般に外出すること自体稀であったことを思えば、この数字は決して少なくないだろう。これら一五件中の六件が妊娠と出産に関わるものである。嘆願者の出身地を見ると、エビダウロスとその周辺が最も多いのは当然だが、遠方のマケドニアや小アジア、エーゲ海の島々の地名も見られ、ほぼ地中海世界全域から人々が集まってきたことが窺える。次に嘆願者の病状を見ると、突出しているのは目の障害で、二番目が手足などの麻痺である。盲人の目が見えるようになるというのは、古今東西、癒しの奇跡物語の典型と言えらるだろう。これら以外にもさまざまな病氣や怪我が見られるが、しばしば指摘されているように、ほとんどが慢性的な病が障害である。これらは当時の医学ではほぼ治療不可能であった。当時の医学文献に頻繁

に見られる、熱病などの感染症と思われる病気が一件もないことも目を引く。もっとも、これはある意味当然のことで、急性病や重症の患者は、アスクレピオスの神域までやって来ることも自体が困難であつたろう。また、治療に成功しなかった事例は当然、碑文に刻まれることはなかったのだから、その点も考慮すべきである。さらに、注目すべき点は、癒し以外の嘆願内容もあることである。行方不明者の居場所や財宝の隠し場所を尋ねる嘆願者にも、神は夢の中で指示を与えている。<sup>10)</sup>

患者がどのようにして癒されたのかを見ると、五一件中四一件で眠りに就いたことが語られている。一件だけ、昼間アパトンの外で眠った例（A17）があるが、他はすべて夜にアパトンの中で就寝したものと考えられる。これら四一件中、三三件で夢を見たことが語られている。ただし、夢に言及されていない事例でも、眠って癒されたものは、夢を見たことが前提とされていると考えられる。夢を見なかったたので癒されなかったと言われている例（B5、B13）があることから、アスクレピオスの癒しは夢を通して行われるとみなされていたことがわかる。

実際、夢の内容を見ると、ほぼ例外なく神が登場する。ただし、「美しい少年」や「容姿端麗な若者」、あるいは「蛇」が現れて、「神」が現れたとは言明されていない例（A14、A17、B19）もある。夢の中で神は、患者に指示を与えたり、治療を行ったりしている。中には、首を切断するというような荒唐無稽な話（B1、

B3）もあるが、治療法が述べられている場合、むしろその多くが、医術に則した医療行為に近いものであることに注目すべきだろう。<sup>11)</sup>つまり、アスクレピオスは、たんに奇跡によって病を癒す神ではなく、あくまで医術によって病を癒す神だとみなされていたことが確認できるからである。

ただし、夢によらない癒しも九件語られている。これらの事例では、しばしば「目覚めた状態で (waking)」という言葉で、それが覚醒時の出来事であることが強調されている。このことから、夢によらない癒しは例外的な事例であることがわかる。これらのうち六件では、動物が癒し手として登場する。<sup>12)</sup>そこに登場する蛇と犬は、ともにアスクレピオスの使い、聖獣とみなされていた動物で、蛇は夢にも登場する。

さてここで、これらの碑文の成立事情についても若干の指摘をしておきたい。<sup>13)</sup>これらの碑文が刻まれたのは前四世紀後半とされているが、そこに刻まれた物語自体は、当然それ以前から存在していたものと考えられる。すなわち、碑文に刻まれていたか、あるいは口承のみだったかはともかくとして、これらの碑文は、すでに存在していた癒しの物語を、あらためて収集・整理したものであることは明らかである。すると当然その時点で、取捨選択が行われ、場合によってはオリジナルの物語に変更が加えられたこともあっただろう。つまり、そこにはこれらの石碑を作成した神殿当局の思惑や意図が介在しているということである。この点は、

「癒しの事績」を読む上で十分留意すべきである。実際、詳しく見ていくと、これらの物語の中には神殿当局の思惑を窺わせるものや、物語自体の成立に関して示唆を与えるものが少なくない。以下、これらの点を踏まえた上で、個々の事例をいくつか見ていきたい。

## 二 癒しの奇跡物語

もともとこれらの石碑が何本あったか定かではないが、最も状態の良い石柱Aが、四本以上あった石碑の最初に位置するものであることは、その冒頭に「アポロンとアスクラピオスの癒しの事績」と表題が刻まれていることから明らかである。したがって、A1の事例は、数ある事績の第一番に置かれたものとして注目に値するだろう。

〔A1〕クレオは五年間身ごもっていた。この者はすでに五年も身ごもったままだったので、嘆願者として神のもとへやって来て、アバトンの中で眠りに就いた。そこから立ち去って聖域の外に出たとたん、彼女は男の子を産んだ。その子は生まれるとすぐに、自分で泉の水で身体を洗い、母親について歩き回った。このような幸運に恵まれた彼女は、奉納品の上に次のように刻んだ。「驚嘆すべきは奉納板の大きさではなく、神の業である。クレオは五年間腹の中に重荷を身ごもっていたが、中で眠りに就いている間に、神は彼女を健康に

した」。

この事例でとくに興味深いのは、この物語の起源になったと思われる奉納板に記された文が引用されていることである。奉納品への言及は他にも多数見られるが、このような事例は他にない。奉納板 (Kisak) とは古くは木製の板で (後にはテラコッタや石や金属製のものもある)、絵が描かれ、文字が刻まれていた。わが国の絵馬に相当すると言える。

A2も同様な異常妊娠だが、こちらの話の方が手が込んでいる。〔A2〕三年の妊娠。ペラナのイトモニカは子孫のことで聖域にやって来た。彼女は中で眠りに就いて幻を見た。彼女は神に女の子を身ごもるようにお願いしたように思えた。アスクラピオスは身ごもるであろうと言って、何か他に願い事があれば、それも叶えてあげようと言ったが、彼女はそれ以上望むことは何もないと言った。彼女は身ごもり、出産のことで嘆願者として神のもとに赴くまで、腹の中に三年間子を抱えていた。彼女は中で眠りに就いて幻を見た。神が彼女に、彼女が願ったことすべてが起こったではないか、彼女は身ごもったのではないかと尋ねたように思えた。出産のことについて彼女は何もお願いしなかったのだ。何か他に望みがあれば、それも叶えてあげるから言いなさいと、神が尋ねたにもかかわらず。しかし、今彼女は神の前のにいますのだから、そのことも叶えてあげようと神は言った。その後で、彼女は

急いでアバトンの外に出て、聖域の外側に来ると、女の子を産んだ。

両者とも、聖域の外で出産したと言われているのは、聖域の中では穢れを忌むことから、出産することや死ぬことが禁じられていたからである。ただし、聖域というのは、広大なアスクレピオスの神域全体を指すのではなく、神殿を中心としたかなり限られた場所だったと思われる。

A1とA2の主題が同じであったように、A3とA4は、ともに嘆願者が「癒しの事績」を信じなかったという共通したモチーフが語られている。とくに、A4では「銀の豚」という奉納品が言及されている。

〔A4〕アタナイ（アテナイ）から来た片目のアンブロシア。この者は嘆願者として神のもとにやって来た。聖域の中を歩き回っていたとき、癒しの事績のいくつかをあざ笑った。夢を見るだけで足萎えや盲人が健康になるなんて、信じられないしあり得ないことだと思ったからである。彼女は中で眠りに就いて幻を見た。彼女に神が現れて次のように言ったように思えた。健康にしてあげるが、しかしその報酬に、無知の記念として銀の豚を聖域に奉納しなければならぬ。神はこう言って、彼女の病んだ目を切開して薬を注入した。朝になると、彼女は健康になって出て行った。

奉納品としては先ほどの奉納板の他に、もっと大きな奉納浮き

彫りや、個人による「癒しの事績」の石碑もあった。しかし、最も一般的なものは、患部をかたどった素焼きの模型であった。変わった奉納品としては、この銀の豚の他にも、次に見る鉢巻や、さいころ（A8）、茶碗（A10）などが語られている。これらの話はいずれも、奉納品の由来を説明する縁起物語と言える。つまり、これらの物語は、変わった奉納品がまずあって、それを説明するために生まれた物語であった可能性が高い。

A5は目覚めているときに癒しが行われる例外的な話の一つで、アバトンで眠りに就く以前の儀式や手続きに関して言及されている点で貴重である。

〔A5〕唾の少年。この者は声のことで聖域にやって来た。最初の犠牲を捧げ、仕来りとして定められたことを行った後で、神に灯を運ぶ係の者が、少年の父親に目を向けながら、願ひ事が成就したら、一年以内に平癒感謝の犠牲を捧げることを約束するように命じた。すると、少年が突然、「僕が約束します」と言った。父親が驚いて、もう一度言ってみるよう命じると、少年は再び言った。そして、このことから彼は健康になった。

次のA6とA7は一続きの物語で、まるで「こぶとり爺さん」を思わせる面白い話である。

〔A6〕額に入れ墨のあるテッサリアのパンダロス。この者は中で眠りに就いて幻を見た。神が彼の入墨を鉢巻で縛っ

たうえて、アバトンの外に出たら鉢巻を解いて、それを神殿に奉納せよと命じたように思えた。朝になって、起きて鉢巻を取ると、額の入れ墨が消えているのを見た。彼は、額にあった文字が付いているその鉢巻を、神殿に奉納した。

〔A7〕エケドロスはすでにあつた自分の入れ墨に加えて、パンドロスの入れ墨をもらつた。この者は、自分の代わりにエビダウロスの神に奉納するやうにと、パンドロスからお金を預かつたのだが、それを支払わなかつた。彼は中で眠りに就いて幻を見た。彼に神が現れて、アテナ女神像を奉納物として聖域に納めるために、パンドロスからいくらかのお金を預かつているのではないかと、尋ねたやうに思えた。彼は、パンドロスからそのようなものは何も預かつていないと答え、しかし、もし自分を健康にしてくれるなら、自分が像を刻んで奉納しようと言つた。その後で、神はパンドロスの鉢巻で彼の入れ墨を縛つて、アバトンの外に出たら、鉢巻を取つて泉の水で額を洗つて、水に顔を映してみなさいと命じた。朝になって、彼はアバトンの外に出て鉢巻を取つたが、それには文字が付いていなかった。水面を覗き込むと、彼の額には自分の入れ墨に加えて、パンドロスの文字が付いているのを見た。

この額の入れ墨というのは、おそらく奴隷の印として付けられたもので、彼らは自由の身となつた後、その入れ墨を消してもら

いにエビダウロスにやつて来たものと思われる。不信心や、奉納をしなかつたために罰が当たる話は他にも見られる。<sup>16</sup>

少し飛ばして、A15は、同じ事例を記した独立した奉納碑が出土している唯一の例で、注目値する。

〔A15〕身体が麻痺したランプサコススのヘルモディオス。(神は)中で眠りに就いているこの者を癒し、外に出たら、できるだけ大きな石を聖域の中に持つて来るやうに命じた。彼は、今アバトンの前に置かれてゐる石を持つて来た。

〔奉納碑〕ランプサコススのヘルモディオス。あなたの御力の見本として、アスクレピオス様、私が持ち上げたこの石を私は奉納しました。あなたの技の目に見える証拠として、すべての人に見せるため。というのは、あなたとあなたの御子たちの手の中に来る以前には、私は忌まわしい病によつて胸の臍場に悩まされ、両手が使えなかつたのに、バイアン様、あなたは私にこの石を持ち上げるやうに説得し、私を病知らずで暮らせるやうにしてくださいました。

一見すると、奉納碑がオリジナルで、これを元にしてA15の碑文が刻まれたように思える。しかし、事情はそう簡単ではない。この奉納碑は、書体から前二〇〇年頃に刻まれたものと考えられるからである。これに対しては、古くなって傷んだ碑文をこの時期に写し直したのだという見解もあるが、言葉遣いや内容からして、奉納碑の文章はA15が刻まれた時期より後の時代に書かれた

可能性が高い<sup>(18)</sup>。このことは、個人名による奉納碑が、必ずしもその人物によって奉納されたオリジナルの碑文ではない可能性を示唆している点でも重要である。おそらく、古くからアパトンのそばに「ランブサコスのヘルモディコス」と刻まれた大きな石があって、それにまつわる口承が両者の碑文のもとになったのではないだろうか。

次のA16は夢によらない癒しの一例だが、あるいは現実にも起こりうるのかもかもしれない。

〔A16〕跛のニカノル。この者が目覚めた状態で座っていたとき、ある少年が杖をひたたくて逃げて行った。彼は立ち上がった追いかけて行き、このことから彼は健康になった。

「癒しの事績」には興味深い事例が他にも多数あるのだが、割愛して、最後に、エビダウロス以外の土地での出来事という点でも、二晩にわたる就寝が語られている点でも例外的な、B3を取り上げる。

〔B3〕トロイゼンのアリストゴラ。この者は腹の中に虫がいたので、トロイゼンのアスクラピオスの神域で眠りに就いて夢を見た。神ご自身はその地にいなくてエビダウロスにおり、神の息子たちが彼女の頭を切り離したが、もとに戻すことができないので、神に来てもらうために誰かをアスクラピオスのもとに送ったように思えた。その間に昼になってしまい、神官は頭が身体から切り離されているのをはっきりと見

た。夜がやって来て、アリストゴラは幻を見た。彼女には、神がエビダウロスからやって来て頭を首の上に置いて、その後で彼女の腹を切開して虫を取り出し、再び縫い合わせたように思えた。そして、このことから彼女は健康になった。

夢を見なかったので癒されずに帰ったというB5とB13の記述からも、アパトンでの就寝は一晚限りとされていたと考えられる。さらに、この事例は同様の物語が別の文献によって伝えられている点で考察に値する。アイリアノスは『動物の特性について』第九卷三三において、歴史家ヒッピュスの証言として、これと同様の話を記している。アイリアノスは後二〜三世紀の人物だが、彼が引用しているヒッピュスは、一〇世紀末にビザンティンで編集された『スーダ』事典によれば、ペルシア戦争の頃の人とされる。両者の話の際立った違いは、B3ではトロイゼンでの出来事とされているのに、アイリアノスではエビダウロスでの出来事とされている点である。つまり、B3の物語では、同じアスクレピオスの神域でも、他の場所に対するエビダウロスの優位が語られていると言える。どちらの話がより古いかには決めたいが、アスクレピオスにまつわる話として古くからあった物語に、エビダウロスにとって都合のよい脚色を加えられたのではないだろうか。

「癒しの事績」の解釈をめぐっては、発見当初（一九世紀末）、これらの物語はすべて神殿当局による創作・捏造であるとする見解が表明された。それに対しては、さまざまな合理的な解釈が試みられてきた。例えば、アバトンの中で現実には何らかの医療行為が行われていたと考える人たちがいた。あるいはむしろ、患者を欺くような何らかのトリックが演じられていたと考える人たちもいた。このような推測は今日でもしばしば行われている。あるいは、夢を見ることが一種の心理療法として、実際に治療効果があったのだと主張する人たちもいる。しかし今日では、アバトンでの就寝は純粋な宗教的行為であり、「癒しの事績」には当時の人々の宗教的経験が反映されているというのが、一般的な見解であろう<sup>19)</sup>。

そもそも、これらの石碑は何のために建てられたのだろうか。まず考えられるのは、嘆願者にアバトンでの就寝に向けて心理的な準備をさせる役割があったという点である。それは治療効果を高めることにも貢献しただろう。実際、いくつかの状況から、これらの石碑はアバトンの中に設置されていた可能性<sup>20)</sup>がある。あるいは、より現実的には、神殿当局の広告・宣伝の役割を果たしていたと考えられる。まさにこれらの碑文が刻まれた時期に、エビダウロスの国家は神事使節団 (*Beaon*) を地中海世界各地に派遣

して、アスクレピオス信仰の普及と拡大に努めるとともに、聖地運営のための寄付を募っていたことが、碑文から判明している<sup>21)</sup>。

したがって、「癒しの事績」の石碑の作成自体が、そのような国家と一体になった神殿当局による宣教活動の一環であったとも考えられる。実際、先にも指摘した通り、「癒しの事績」には神殿当局の思惑が反映していることは明らかで、解釈にあたってはその点を十分留意しなければならない。しかし、それでもなお、これらの物語の根底には、当時の一般の人々の思いが込められていることも確かであり、我々はそこに、病や障害に苦しむ古代の人々の切実な願望を読み取ることができるであろう。

- (1) 『ピュティア祝勝歌』第三・一—五八行。オウイディウス『変身物語』第二巻五四—六四八行もほぼ同じ。パウサニアス『ギリシア案内記』第二巻二六章三—五節は、これとは異なるエビダウロスの伝承を記してゐる。
- (2) Cf. Ps. Eratosthenes, *Catasterismi*, I, 6.
- (3) Cf. *Inscriptiones Graecae* (IG & 略号), IV<sup>2</sup>, 136.
- (4) Cf. IG, II, 4960.
- (5) 『ピュティア』一—八A参照。
- (6) Cf. Livius, *Periocha*, XI.
- (7) アスクレピオス信仰と合理的医学はほぼ同時期に誕生し発展したもので、古代を通じて敵対・対立するものではなく、むしろ相補的なものとして共存していた。これに対して、それ以前から存在した呪術的な治療は、この両者から排撃される立場にあった。 Cf. V.

Nutton, *Ancient Medicine*, London 2004, pp.103-114.

(8) *IG IV<sup>1</sup>*, 121-124. この中の全体の内容が判読できているのは五〇件前後。トットレータ L. R. Lidonnicci, *The Epidaurian Miracle Inscriptions: Text, Translation and Commentary*, Atlanta 1995 下巻 p.12。

(9) 瘰癧内容・症状が記載されている五〇件のうち、目の障害が一〇件、四肢の麻痺が八件ある。

(10) Cf. B4, C3. この他に『入れ墨の消去 (A6, A7)』や『癒した無関係の話題 (A10, C4)』がある。

(11) 夢の内容が記されている三六件中たは、手術 (六件)、『投薬 (五件)』、『運動療法 (三件)』、『異物の摘出 (三件)』などの治療法が語られている。

(12) Cf. A16, A20, B6, B23.

(13) Cf. A17, B13, C2. 大 A20, B6. 瘰癧 B23. A17 では同時並行である。B19, B22 では瘰癧の中に所収である。

(14) この問題については cf. Lidonnicci, *op.cit.*, pp.20-75.

(15) 『イナ』神文の和訳においては、固有名詞は方言形の本字カタカナで音写し、母音の長短は区別しない。

(16) Cf. A7, A11, B2, B16, C4.

(17) *IG IV<sup>1</sup>*, 125.

(18) Cf. Lidonnicci, *op.cit.*, p.58.

(19) 瘰癧の分類については cf. E. J. & L. Edelstein, *Asclepius: Collection and Interpretation of the Testimonies*, Baltimore 1945, vol.II, pp.142-145; E. R. Dodds, *The Greeks and the Irrational*, Berkeley 1951, p.112.

(20) Cf. Lidonnicci, *op.cit.*, p.18.

(21) Cf. *IG IV<sup>1</sup>*, 94-95.

「しちや・むつひろ」古代ギリシア・ローマ思想

早稲田大学講師